

三輪昭子『映画で地球を読む ―地球市民のための教養講座―』
 (黎明書房 2009年10月刊)
 ISBN 978-4-654-01828-4 C1074



本書『映画で地球を読む ―地球市民のための教養講座―』の著者三輪昭子さんの映画好きは、以前から有名な話であった。学会などでお会いした際に「最近見た映画は何かありますか？」と訪ねると、多くの題名が挙げられ、またその鑑賞の頻度を聞くにつけ、本当に映画がお好きなのだなど感心したことが一度ならずある。その三輪さんが、長年温めてこられた「映画の目を通して世界の諸問題に迫る」という企てを、いよいよ実現されたのが本書である。

本書の構成は、「ミュージカル」仕立てとなっている。前書きにあたる“Opening”は開演の導入であり、本書の紐解き方、すなわち観客(?)の心得が説かれている。

幕が開いた後は、第1幕(Act One)の「知らない方がいい? 食べ物と格差と情報の話」、第2幕(Act Two)「異邦人だらけの祖国! 実験場としての他文化共生社会」を経て、第3幕(Act Three)「欲望の集積地? 世界とつながるアフリカ」まで、一気にストーリーが展開する。

読み進めるうちに不思議なことに気付く。本書で紹介されている映画をすべてみたわけではないのに(評者はリストアップされた中の二割も見えていない)、なぜか映画のシーンが頭の中で再現されているような感覚に陥る。映画のストーリーの描写のうまさ、それを補う写真やイラストの巧みさが、読み手に *déjà-vu* をもたらすのではないか。

しかし、ストーリーテリングが巧みだという点は、本書の存在意義の小さな部分に過ぎない。本書の意義は、むしろその「映画と課題をつなぐ」という点にある。各章では、映画の底流に流れる社会問題の構図がわかりやすく図示され(例えば、本書15頁や53頁)、また問題の背景や補足の説明がさらなる興味を引き出すように導かれている(例えば、「ハッピーセット」のキャラクターグッズに込められた深謀など)。この「映画と課題をつなぐ」ことの有効性こそ、本書で三輪さんが主張したかったことではないか。映画という虚構やデフォルメを通すことで課題の大きさや現状の困難さをより実感を持ち、また感性を働かせて認識させることができるということ、その方向がより多くの人を社会の抱える諸問題にコミットさせる力になると示したかったのではないか。

最後にリクエストをひとつ。本書が取り上げる映画は、三輪さんの映画コレクションの中でも比較的最近(最も古いものでも1999年)の作品が選ばれている。ぜひ、20世紀の各年代の映画にまでさかのぼり、その読み解き方を指南していただきたい。そうすれば、さらに時代性や現代史の視点まで得られるだろう。

巻末には本書で取り上げた映画作品の一覧も付されている。評者は、2冊目を自宅のビデオの横に置き、映画鑑賞の手引きとして利用したいと考えている。

(愛知教育大学 生活科教育講座 久野弘幸)